

学校の活動が パワーアップ!

特集 ◎ 参上! 学校応援団

田んぼの先生

11 / 26
豊科南小学校

11月26日に開かれた豊科南小学校の収穫祭。地域コーデイネーターの横川英子さん（豊科）の声かけで集まった農村女性学習会（学校支援ボランティア）の皆さんは、臼と杵、ぬかくどを設置し、手良く子どもたちと餅つきをしています——。

子どもたちから「田んぼの先生」と呼ばれているボランティアと豊科南小の5年生は、1年間を通じて米作りの授業を行いました。

同校では、以前にも学校とPTAを中心に米作りの授業に取り組んでいました。しかし、田んぼがあった場所に学校のプールが建設された事で、再開の見通しが立たないまま米作りの授業は中断されていました。市の農業委員も務める横川さんは「豊かな田園に囲まれて育った安曇野の子どもたちには、ぜひ米作りを経験してほしい」と、学校と調整を図り、米作り再開に向けて動きました。横川さんはまず、地域農業委員会に相談し、近くの荒廃田を耕作する準備を進めました。あわせて、生産者の仲間たちに声をかけ、学校の米作

りを支える人手を確保しました。そして一昨年、念願がかなって再開した米作りには、仲間のボランティアだけでなく、地元農業委員やPTAも加わっていました。この実績を見込まれ、横川さんは学校支援地域本部事業がスタートした際に地域コーデイネーターに就任。学校と地域をつなげる継続的な役割を担うようになりました。

横川さんは、「夏場の草取りは子どもたちだけでがんばってくれました。そのかいあって無農薬で育てることができましたよ」と笑みをこぼしながら一年を振り返ります。みんなで大事に育てたお米は、この日、ボランティアの皆さんが最後のお手伝いをして、おいしいあんころ餅へ。PTAの皆さんも手伝って収穫祭は無事終了しました。

「学校というPTAという事になりがちですが、学校でもPTAでも分からない事、できない事が最近増えていると感じます。もっと地域でも学校にかかわっていかないと、子どもたちに豊かな経験はさせられないと思います」と横川さん。

学校で収穫できたのは、お米だけではなく、お米だけではありません。



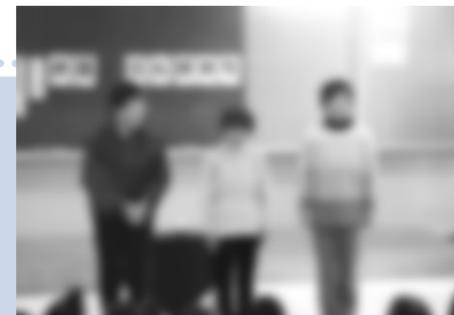
この日、主にお手伝いした豊科農村女性学習会の皆さんは、ぬかくどでお米を炊いている間、子どもたちのお正月の食生活について話していました。



言葉をはぐくむ

お話のローソクに願いを込め吹き消す子どもたち

穂 高絵本とお話の会（学校支援ボランティア）は、たくさんのお話の子どもたちに、絵本の読み聞かせ、すばなし、わらべうたなどを聞いてもらい、その楽しさを知ってもらおうと昭和59年ころから活動開始。穂高地域の図書館・保育園・小学校を中心に活動を続け、春秋の読書旬間中には各学校全学年でお話を開いています。



11月24日、穂高南小学校で開かれた1年生のお話会は、パネルを使ったお話の主人公当てクイズでスタート。おなじみのピノキオ、花咲じいさん、かぐや姫などの昔話に、子どもたちからは「知ってる。知ってる」と大きな歓声があがりました。続いて「お話のローソク」に火が灯され、すばなしで、鼻先にソーセイジがくっついてしま

11 / 24
穂高南小学校

ったイギリスのお話「3つの願い」が始まりました。子どもたちはローソクの火に照らされた語り手の話に食い入るように聞き入っています。このほか、エプロンの上で人形がポケットを出入りしながらお話が進行するエプロンシアターの「北風と太陽」など、さまざまなお話が登場しました。すべてのお話が終わると、「お話のローソク」に願いを込めて吹き消され、会員の斉藤恵美子さん（穂高有明）は、「本を読むことで自分の知らない世界をたくさん知ることができま

す。皆さんもたくさん本を読んでください」と授業を締めくくりました。

幼いころの言葉への接触は、まず聞くことから始まります。子どもたちは、大人が話した言葉、つまり「話し言葉」を何回も何回も繰り返し聞いていくうちに、少しずつ言葉を覚え話することができるようになると言われています。言葉の発達面から大人が子どもに「語りかける」「話しかける」ということは大きな意味を持ち、「お話II素話」は、その中でもとても大切な体験であると言えます。

ボランティアの皆さんの着実な取り組みが、学校教育の大きな力となっています。



パネルを使ったお話の主人公当てクイズ。子どもたちの元気な歓声が響きます。

